

第4次ネパール・クンブ医学学術調査研究概要

河合明宣

放送大学群馬学習センター

1989年より数度にわたってネパールのソル・クンブ地方の村落において高所住民＝シェルパを対象とする医学の分野との共同研究を続けている。人文地理学、環境社会学、人類学や広義の医学などの諸学問分野による共同研究は、人と自然との関係に焦点をあてた学際的研究によって多大な成果をもたらすように思われる。

1) はじめに

文部省国際学術研究費による「ヒマラヤ地域の高所極低酸素下における人体の順応機構に関する総合的研究」のもとで定点調査として1989年より数度にわたり医学班との合同でネパールのクンブ地方のシェルパ村落の調査を行っている。

しかし今年度は医学班の参加がなく、3名という少人数でしかも2期間に分かれての小規模な調査となった。

今井と村上はクンブ地域で同じ時期に約1ヵ月、河合は単独で約2週間のカトマンドゥとその周辺にて調査および資料収集を行った。1992年度は本研究計画では調査が行われていなかったポルツェ村で今井が人類学的調査を行った。同村での経済活動は、ヒマラヤ登山およびトレッキングを目的として訪れる外国人の増加に対応して伝統的生業形態から民宿経営や、ガイド報酬に依存するものになってきている。こうした変化によって人と自然環境との共生が崩れ環境破壊が急速に進行すると同時に住民の環境認識に大きな変化が生まれた。当該地域住民にとっては生活の場でありかつ祖先の土地でもあるが外部から訪れるものにとっては都市では得がたい価値を有する(環境権)領域なのである。今井は「世界の遺産」("World Heritage")というキイ概念で、山村、僻地、森林環境、過疎、伝統的生業空間の変容そして自然破壊という共通の苦悩を持つサガルマタ国立公園

(ユネスコ「世界の遺産」1979年指定)と日本の白神山(推薦中)とを同じ土俵に乗せて共通の遺産を未来に受け渡すために何が必要かを聞き取り調査を通じて論じた。

また村上は、同地域がヒラリー・エベレストを中心とする「ヒマラヤン・トラスト」が森林保護、医療、初等教育の充実などを目的に長期に活動している地域に属する点に注目した。ポルツェ村の小学校でこのような地域の初等教育がどのように行われるのか、NGOや国際機関の援助が如何に運営され、地域の未来を担う子供達の意識にどのような影響を与えているのかという点に大きな関心をもって調査した。これまでの調査対象でなかった村落における新しい視点からの調査であり、同地域を対象に医学の分野と共同研究を継続し、総合化するうえで貴重な調査であった。

2) メンバーと研究分野

河合明宣 (44) 京都大学農学部：農村開発；農業経済学

今井一郎 (38) 弘前大学人文学部：人類学

村上満希子 (23) 立命館大学国際関係学研究所：国際関係論

3) 期間

1992年11月 1日：今井出発

11月 5日：村上出発

12月15日：今井帰国

12月20日：村上帰国
1993年 2月13日：河合出発
2月25日：河合帰国

4) おわりに

高所住民を対象とする本研究調査は、面的な広がりや今日の問題をグローバルに把握する作業と特定地域における長期的観測を並行して進める必要がある。人と自然の関係を扱う科学においてはこの関係の空間的見取図とその時間的変化についてのイメージが必要である。人と自然との関係の蓄積に対する理解が両者の将来の関係を拘束する

かもしれない。

文献

- 松林公蔵 1990「ネパール・クンプ医学学術調査隊行動概要」『ヒマラヤ学誌』1
- 松林公蔵 1991「京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画（KUMREH'89-90）－疫学班研究概要－」『ヒマラヤ学誌』2
- 河合明宣 1991「ヒマラヤ高所村落における疫学的研究－人文班研究概要－」『ヒマラヤ学誌』2
- 瀬戸嗣郎 1992「第3次ネパール・クンプ医学学術調査研究概要」『ヒマラヤ学誌』3